

石原 豊子 選

特 選

あの日見た受け入れられぬ父の死が線香をそえる怖き夜の日

呉市立阿賀中学校二年 平本 義仁

【評】「線香をそえる怖き夜の日」に辛い悲しみが、また二句の「受け入れられぬ」にその日の作者の感情が滲み出ている。

眠たげな夏の陽ぬくき照る朝に飛び行く残鶯声涼やかに

広島市立安佐中学校二年 鄭 潤希

【評】三句までは夏の暑さを表現し、「飛び行く残鶯声涼やかに」の四句五句に気持ち的な涼しさを表現しているのが巧み。

送り火を愛してくれた亡き祖父に今は私が哀を込め灯す

県立広島皆実高等学校一年 鋒楯 莞路

【評】盆に御霊への「送り火」を大事に焚いていた亡き祖父。偲びつつ作者は祖父の御霊への「送り火」を焚く心の分かる歌。

八^{はちいちご}一五平和をいのる時間と日くり返さぬよう思いをこめて

県立広島中央特別支援学校中学部三年 彦坂 琉斗

【評】「時間と日」に終戦の日を大事に思う作者。世界各地から争いの報道のある今、四句の「くり返さぬよう」が効果的。

蛭とぶ陰気な初夏の夜を照らし期間限定イルミネーション

安芸高田市立甲田中学校二年 三橋 菜乃

【評】「イルミネーション」の表現が楽しい。また、「陰気な初夏の夜」と「期間限定イルミネーション」が対比的で良い。

木の柱私と比べた幼少期この場所だけが私の証

呉市立呉高等学校三年 松原 花梨

ひさしぶり正月ぶりに会うそふぼなんだか小さくなつた気がする

庄原市立東小学校四年 足利 昭斗

平和への想い込めてドームの蟬にぎやかだけどさみしさまとう

広島市立安佐中学校三年 柿本 美果

春の花土を受け継ぎ夏の花土に戻るねくる秋をまつ

廿日市市立野坂中学校二年 吉本 祐芽

温暖化青い地球が枯れてゆく僕らの星が涙を流す

福山市立向丘中学校二年 岩田 凌我

友に言う「ありがとう」さえも母に言えずその一言が大きな試練

福山暁の星女子中学校二年 塩飽 未佳

あついなつおこめものがかわくよねいっばいできておいしくなあれ

庄原市立東小学校一年 三宅 望愛

朝顔が朝に咲いたら盛夏の候夜中に咲けば秋色の候

廿日市市立野坂中学校二年 佐竹 咲音

友と友どちらの肩を持つべきか間に挟まる私は団子

廿日市市立廿日市中学校二年 宮地 紗葉

努力して見えてた背中次こそは相手に見せる己の背中

呉市立呉高等学校二年 前田 透空

陰の碑に汗たらしつつまたあえた君はヒロシマ祈念せよ

広島市立安佐中学校二年 土肥 健一

時長く待ちたる日々は首長く神楽終わるは一瞬の時

広島市立安佐中学校二年 政田 成

なり響くむすめふさほせ畳の音高みを目指すかるたクイーン

呉市立呉高等学校三年 河本 聖花

パパとならおぼれるようなたかいなみきようてきだけのりこえられる

庄原市立東小学校二年 森山 瑞巴

短歌への挑戦三年目きびしいがつくっていくうち楽しさが湧く

尾道市立向東小学校六年 吉本 琴音

キャンバスに黒いえんぴつ走らせてそこは未来を彩る世界

広島市立船越中学校二年 西村 菜々海

風が止み水に浮かんだはないかだとり残された枝の花びら

府中市立府中学園八年 栗田 進之介

蝉の音鳴り響く夏の上り坂「今日もやるぞ」と走り続ける

尾道市立向東中学校三年 伊藤 獅恩

参観日友に当てられ発表するなぜか止まない激しい鼓動

廿日市市立廿日市中学校二年 板本 悠熙

鍵盤けんぱんに触れた瞬間走る緊張勇気の先にある達成感

安芸高田市立吉田中学校二年 井上 咲希

石原 豊子 選

特 選

会議場の広き空間黙深し原爆死没者名簿の揮毫

広島市 伊藤 恒子

【評】 毎年被爆者の方にて行われる原爆死没者名簿への記帳。その緊張感が上の句に的確に表現されていて心に沁みいる歌。

かけはぎの鮮やかなりし母の腕荒む想いも繕いたるや

福山市 富田 清人

【評】 かけはぎの上手な母。しかし、辛いことなども上手に乗り越えたであろう母を、かけはぎになぞらえた下の句が光る。

幸せは身近なことにあると言う一匹の秋刀魚ふたりの夕餉

呉市 中島 義夫

【評】 一匹の秋刀魚を二人で分け合っていたたく夕餉。それこそが一番の幸せだと作者は感じている。同感できる一首である。

生きるなく死ぬにあらずもクマムシの乾眠の妙に遠く及ばず

三原市 園部 恵子

【評】クマムシは極限の環境にも耐えうる微小な動物。上の句で地球環境の変化に耐えている作者とクマムシの乾眠の比較が妙。

いにしえを慈しむごとからすり白き花もて廃家をおおう

広島市 高本 寿子

【評】「廃家」は作者の実家であったか、今は住む人もない。上の句の「いにしえを慈しむごと」の比喩表現が巧みである。

ねんごろに父の義手干す秋晴れの庭にいちにち蜻蛉とびかふ

炭化せし幹癒やすがにアオギリが季来れば黄の花殻を敷く

炎帝の街かがやける広島^の戦禍は杳し八月の雲

耳鳴りの続く淋しさ空をゆく雲に音あるごとく聞こゆる

包帯の坊やおぶった小学生いかに生きたや八月六日

試歩終えし妻に肩貸し歩を合わす暮れなずむ島^のあじさいロード

いつの世も戦のありて城跡に石垣のみが残れる哀れ

会いたきは会いておくべし八十路なる吾に与えらるる時間限りあり

枕辺に青空しばしとどめたき母はベッドに手鏡を置く

駅前大橋を路面電車はおもむろに八十年前の爆心^{やそとせ}へ向かふ

福山市 林 すみ

広島市 大多和 義

三次市 林 勝子

福山市 杉之原壽美

呉市 小川美和子

尾道市 仲尾 修

広島市 山本 玲子

福山市 金尾 洵子

広島市 岩本 幸久

三次市 磯井ふみ子

遙かなるニューギニアにて餓死せらる伯父に供える大盛りの飯

三次市 林 章子

川沿いのバラック暮らし馴れた頃くじが当たりし高層アパート

広島市 小西 博子

就職の娘と最後の卓囲む風邪ひかぬよう会話少なく

庄原市 松本 進

するすると絹のリボンを解くごとく吐きたきものは終の一息

広島市 永井 勝弘

葉桜の車窓に光あふれ来て万華鏡の中行くがごとしも

尾道市 砂田 悦子

太陽に抗うごとく咲き昇る凌霄花は日の色をして

庄原市 橘 京子

六年の感謝を妻に伝へれば蟬が鳴きだす結婚記念日

広島市 熊谷 純

実の裂けて赤き種粒の弾けたる枝垂れてこぼるる苦瓜の夏

広島市 松田高加子

のぼり来しチヌの魚影は十余り涼風の吹く橋を来れば

広島市 清水 勝子

峡の宿のとどめく川音籐椅子に投げだしてをり白き素足を

呉市 西川 博